

# 注解『七十一番職人歌合』稿(十七)

下房俊一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第三十七番および第三十八番の注解を収めた。

三十七番 豆腐売 素麵売

【職人尽】

〔後撰夷曲集〕素麵 二本の杉簀にこそかかりけめ糸よりけなる三輪のそうめん〔是誰〕〔人倫訓蒙図彙〕豆腐師 職人の内、朝起きの随一也。油あぶら売あける家もあり。／素麵師 伊与、大和の三輪、其の名高し。京にするを、地ぢそうめんといふ。〔春駒狂歌集〕とうふによする恋 名にし負ふおかべのまくず葛だまりかけて思ひをすり生姜哉 〔狂歌ますかがみ〕寄素麵恋 思ひやれあはでうさのみそふめんの身は何とせん心細さを 〔誹諧職人尽〕豆腐売 素麵うり 鶯や門はたまたまとうふうり〔野坡〕 豆腐屋は水が第一ほたる哉〔貞佐〕 松茸の恩に預かる豆腐かな〔乙由〕 豆腐売の呼び声しふる霜夜かな〔谷水〕 明け鳥こごへる声やとうふ売 〔世田谷 和雪〕 とうふやの起きて臙の月見かな〔柳隣〕 捨つる恋ある時は恋し夏豆腐〔寥和〕 かけて干す三輪の麓や糸ぎくら〔佳節〕 素麵の白さや昼の天の川〔抱村〕 そうめんも秋はてられて悲しけれ〔寥和〕 〔職人尽発句合〕五十一番左 豆腐造 秋の夜の臙たうふや雨の雲 秋の雲の雨をもちてうち曇りたる、やや寒にとりあへぬもてなしなるべし。……よき持なるべし。〔味噌もたうふも本是同根生、

雨霰雪や氷と隔れどとは是をやいふらん」 / 五十番右 素麵師 細ものの細きをつたふ風涼し 左右共に、させる味はひもあらねど、細ものの大内言葉は、うつほ、むらさきのやさしふりに通ひて、右勝べし。〔職人尽狂歌合〕左 豆腐造 あつらへの日和とけきは豆腐屋の仕込みてぞ見る淡雪の空 左、初句よろし。結句の淡雪、よく思ひ寄せられたり。右……聊かまさるべくや。〔近世職人尽絵詞〕豆腐屋 「あすはきのえねの日ぞ」「いなかうどは堅き豆腐を好めるがをかしき」「たまたまは江戸の人にもさふらふぞや」 鮫は堅き物をおろす力ありといへども、身は石の舂に碎かれてはんべんと成りては、淡雪豆腐に形を同じうす。人は万物の靈といへども、鳶に油揚をさらはれたるは、いとおろかにこそ見ゆれ。〔暗画職人尽〕淡雪は早くも売れて糊のごとくにし、水六升を入れて煮沸かし、沫を起すとき、油の澁お二滴杖の先に粘つけて、釜の中をかき、沫をきやし、ふたたび煮沸くを待ちて、火を引く。しからざれば焦げつく也。これを酌みて、布の袋に入れ、又水一升五合をもつて釜の中を洒すぎ、ともにしほりて、汁を桶に受くる。其の滓を雪火菜きりなといふ。其の汁いまだ凝こらざる時、塩の鹵汁四分一を和て、静しずかき合すれば、頓て凝るなり。是を箱に盛石をおしこす。暫くして取り出し、冷水に入れてよし。但し、鹵汁多ければ豆腐かたし。箱には底へ布を敷くべし。〔難波職人歌合〕上 二十二番 左 豆腐屋 みかしほのにがりさきなん海の月荒磯浪に影のくだくる 右の方人云、おのが豆腐つくる心もて、月影のくだくるにしほさして堅めむとは、あまりに愚かしく、且つ、にがりといふ事もいかがといふべし。左方答、然り。愚かしきことを思ひ寄りたるままにいひ出せるこそ、歌のほいなれ。判に云、左の歌、聊か俳諧めきたりとはいふべけれど、さしも難むづかすべきにもあらず。……(右)勝ちたり。

## 【本文】

## 卅七番

ふるさとはかへのとたえにならたうふ  
しろうきは月のそむけさりけり

ふるさと―【類】故郷 ならたうふ―【忠】【類】ならとうふ【明】なら  
しろうふ  
しろうき―【類】白き

てうきいのこしきのうへのあつむきの  
むしあけのせとの月わたる見ゆ

左、なにとなくよろし。右も、心はめくれり。  
されとも、こしきの上とむしあけと、おなし  
もしにや。よりて、左を勝とす。

こひすれはくるしかりけりうちたうふ  
まめ人の名をいかてとらまし

わかこひは建仁寺なるさうめむの  
こゝろふとくもおもひよるかな

左、うちたうふまめと、よくつゝけたり。まめ  
人の事、両説あるにや。まことある人とも  
いへり。彼源氏の夕霧の大将は、まことし  
きによりて、まめ人の大将といへり。一儀には、  
ぬしある人を夜はふを、ま女といふといへり。  
此哥はいつれにもかなふへし。右は、第二の句  
こはし。左勝へきにこそぞ。

たうふうり

たうふめせ。

ならより

うへ―[類]上

月わたる見ゆ―[類]月渡るみゆる

なにとなくよろし―[類]何となく宜し

もし―[類]文字

こひすれはくるしかりけり―[類]恋すれは苦しかりけり  
うちたうふ―[忠][明][類]うちとうふ

わかこひ―[類]我恋

こゝろふとくも―[類]心ふとくも

うちたうふ―[忠][明][類]うちとうふ

事―[類]こと あるにや―[類]有にや まこと―[類]実

いへり―[類]云り 彼―[類]かの

一儀―[忠][明][類]一義

ま女―[尊][類]まめ[明]ま女

こはし―[忠]よはし

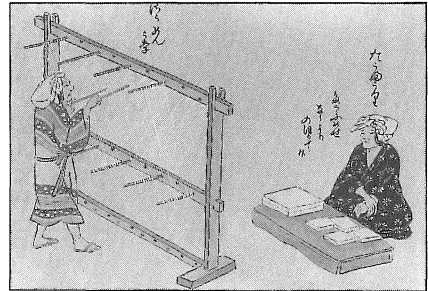
たうふうり―[白][類]豆腐うり[忠]非七番豆腐うり[明]とうふうり

たうふ―[明][類]とうふ

なら―[白][忠]奈良

のほりて  
候。

さうめんうり



【語注】

◎豆腐は、南北朝時代ころから奈良の寺院で作られ、室町時代には庶民にも広まった。

「さうめん」は、「索麵さくめん」の転。室町時代、京都には、中御門家配下の索麵供御人や賀興丁座の索麵売がいた。  
豆腐、索麵ともに、禅宗寺院から広まった精進料理。

◎ふるさと かつて住んでいたり通ったりした、なじみの家。

◎かへのとたえにならうふ 「壁」は女房詞で、豆腐のこと。その縁で、家の「壁」を出す。「壁のとだえ」は、壁が壊れていることをいうのであろうが、不自然な表現である。(二番左、壁塗の月の歌には、「古里の壁の崩れ」とある。)  
「とだえ」に、久しく古里を訪れることのなかった意をも含ませるのであろう。「壁のとだえにな(る)」から、「奈良豆腐」と続く。「奈良豆腐」は、奈良産の豆腐であろう。『蔭涼軒日録』延徳二年九月十四日条に、「奈良豆腐一箱」と見える。絵の中の言葉にも、「奈良より上りて候」とある。

◎しろきは月のそむけさりけり 「白き」は、壁が壊れたために、月の光が家の中まで射し込んでいることをいうのであろう。また、「白し」は、「壁」および「豆腐」の縁語。「背く」は、ここは、見捨てる意であらう。(自分は古里を捨ててしまったが、)月は見捨てていかなかったのだ。

◎てうさい 調菜。副食物、特に、精進物を調理すること。また、その人。本職人歌合五十七番右に、「調菜」が登場

する。

◎こしき 甑。

◎あつむき 熱麦。熱くして食べる麵類。こしは、素麵。

◎むしあけのせと 「熱麦の蒸し上げ」から「虫明の瀬戸」と続ける。「虫明の瀬戸」は、備前国邑久群虫明（現岡山県邑久郡邑久町虫明）に至る航路にある、長島と鴻島との間の瀬戸。歌枕。「かげうつすそではうきねのわれからに月ぞもにすむむしあけのせとへ雅経」（続古今集十、羈旅歌）のように、月を詠み込んだ例歌が多い。ただし、「蒸し上げ」と掛けて用いるのは、「とますべき舟もあぶらも夏の日の涙の真砂をむしあけのせと」（草根集）のような例がないではないが、極めて異例のことである。

◎見ゆ 類従本は「みゆる」とあるが、誤写であろう。動詞（助動詞）終止形＋「見ゆ」で終わる歌は、「さ夜中と夜は更けぬらしかりがねの聞こゆる空に月渡る見ゆ」（万葉集、九、雑歌、この歌は古今集にも載せる）など、万葉集に多い。

◎心はめくれり 歌論書には、「詞の字の題をば、心をめぐらして詠むべし、と申すめり」（八雲口伝、題を能々心得とくべき事）など、「心をめぐらす」の用例があり、表現に趣向を凝らすことをいう。「心めぐれり」も、趣向を凝らした表現についていうのであろう。

◎こしきの上とむしあけと、おなしもしにや 「甑の上」と「蒸し上げ」とは類義語だから、この二つを詠み込むのは同心病に当たるのである。二十九番語注「なかむるとみるとはおなし事にや」の項参照。

◎うちたうふ 「宇治豆腐」で、宇治で作られた豆腐であろう。「宇治」に「憂し」を掛ける。

◎まめ人の名をいかてとらまし 「まめ人」について、判詞は、「まめ人の事、両説あるにや。まことある人ともいへり。……一儀には、ぬしある人を夜ばふを、ま女といふといへり。此哥はいづれにもかなふべし」とするが、やや問題がある。判詞は、本来、まじめという意味の「まめ」が、時として、色好みの意味でも用いられ、その限りにおいて正反対の両義を持つことをいうのであるが、しかし、「まめ人」という熟語は、実際には、「まめ人の名をとりて、

さかしがり給ふ大将」(源氏物語・夕霧)のように、浮ついたところのない、まじめな人の意味で用いられている。(一方、「その女……ひとりののみもあらざりけらし。それをかのみめをとこ、うち物語らひて」(伊勢物語・二二)の「まめ男」は、これもまじめな男という意味であるとされるが、この熟語は、後世は、「信乃国ニ、アル人ノ妻ノ許(二)、マメ男ノカヨフヨシ夫聞テ」(梵舞本『沙石集』七・一)のように、もっぱら色好みの意味で用いられるようになる。)その上、ここは上句に、「恋すれば苦しかりけり」とあるから、(そういう苦しい恋の思いから逃れて、)何とかして、実直だと人からも噂されるようになりたい、と取るのが自然であろう。「まめ」は、「豆」に通じ、豆腐の縁語。

◎わかこひは…… 「わが恋は……」という形式は、恋の歌の典型の一。五番語注「わが恋は」の項参照。

◎建仁寺なるさうめむの 「建仁寺」は、現京都市東山区小松町にある臨済宗の寺で、京都五山の一。建仁二年、栄西の創建。最盛期には塔頭寺院五十余を数えたが、応仁文明の乱後、堂宇は荒廃していた(『国史大辞典』「建仁寺」の項、『京都大事典』「建仁寺」の項)。「建仁寺なる索麵」は、建仁寺で作られた索麵か。未考。下句に「心太くも」とあるから、普通より太い索麵だったのであろう。尊経閣本などの絵の中の言葉に、「これは太索麵にしたる」とある。全体で、序詞的に、下句の「心太くも」の「太く」にかかる。

◎こゝろふとくもおもひよるかな 「心太し」は、大胆なさま。勿論、歌に用いるべき言葉ではない。「思ひ寄る」は、人を好きになること。我ながら、大胆にもあの人を好きになってしまったことだ。本職人歌合、七十一番、心太売の恋の歌に、「思ひ寄りける心太きよ」と、似た表現がある。

◎うちたうふまめと、よくつゝけたり 「宇治豆腐」から、豆腐の縁語「豆」を連想し、「まめ人」と続けた技巧を褒める。

◎まことある人ともいへり 「まめ人 文選。展季と書。まことしき人也」(源氏物語千鳥抄)、「まめ人 展季マメ人。真人。夕霧大将ヲ云」(類字源語抄)などの説をいうのであろう。

◎彼源氏の夕霧の大将は、まことしきによりて、まめ人の大将といへり 『源氏物語』夕霧巻冒頭に、「夕霧の大将」のことを、「まめ人の名をとりて、さかしがり給ふ大将」という。

◎一儀 「一義」に同じ。忠寄本、明曆板本、類従本は、「一義」。室町時代には、「二義」と「一儀」とは、同一語と意識されていたらしい（『時代別国語大辞典 室町時代編』、「いちぎ（一義・一儀）」の項）。いま一つの意味。

◎ぬしある人を夜はふを、ま女といふといへり 「主ある人」は、夫や恋人のいる女。「夜はふ」は、正しくは「呼ばふ」で、男が女に言い寄ること。また、女のもとに通うこと。「まめおとこ 実なる人をまめ人と云心也。そのゆへは、人のつまに思ひをかけ心をつくすは、真実に切なる思ひある故也。大かたの思ひにてはかくあるべからずと也」（伊勢物語肖聞抄）などの説をいうのであろう。

◎此哥はいづれにもかなふへし この歌はどちらの説にも合う、というのであるが、前述のごとく、後者の意味に取るのは無理がある。

◎右は、第二の句、こはし 忠寄本は「よはし」とするが、誤写であろう。「建仁寺」という字音語を用いた点、また、そもそも、「建仁寺」のような寺名を歌に詠むことは通常ないのに、あえてそれを詠み込んだ点を「こわし」と難じるのであろう。

◎さうめんうり 底本は索麵売の言葉を欠くが、尊経閣本などには、「これはふとさうめんにしたる」とある。「太索麵」については未考だが、恋の歌の、「建仁寺なる索麵の心太くも」と照応する。

◎ならよりのほりて候 月の歌の「奈良豆腐」と照応する。

### 【絵】

豆腐売は、桂巻をし、小袖を着て、台の前に座す。台の上に豆腐を入れたと思われる箱と豆腐四丁。白石本、忠寄本は、台と豆腐の描き方に小異。

索麵売は、桂巻をし、小袖を着て、草履を履く。三段になった木匠を用いて、竹管にかけた索麵を延ばしているところ。なお、大和の索麵座では、明らかに女子の相続が認められていたという（新大系、付録）。

## 【参考】

○かくて年を経るほどに、文太、主に言ひけるは、かりそめに奉公に参り、はや年月ふりまいらせ候ふ。御いとまたまはり候へ。私に住み候はんたよりなく候ふほどに、塩竈一つたび候へ。われらも塩焼きて売りたく候ふ、と言ひければ、主もとよりあはれみける物なれば、やすき事とて、塩竈一つ取らせけり。それより文太、塩焼きて売りけり。しかるべき事にや、文太が塩は心もよく、買いぬる人も色白く、この塩を食う人は病もなく、命も長く、心にかかる事もなし。されば、余の塩の価十倍をもつて買ひければ、いつしか限りなき長者となりにけり。

(慶応義塾図書館蔵、奈良絵本「文正草子」)

○われらは、熱く、切られた素麵アレトウワ(スパゲッティ)を食べる。彼らはこれを冷水に漬け、たいそう長いのを(そのまま切らずに)食べる。  
(日本覚書、六)

○われらは砂糖や卵やシナモンで(麵類を)食べる。彼らはそれを芥子や唐辛ピメンタで食べる。  
(同)

## 三十八番 塩売 麵売

## 【職人尽】

〔飛鳥井雅康 職人歌〕三番

商人

あきなひの秋のあたひもたかしほのこよひそ月の名をもうるなる

塩屋

おほひそむる胸のやきてのしほ煙なひきなひかすせめてとははや

〔吾吟我集〕寄塩恋 こぼれぬる目もとのしほはなめねどもからくも人に思ひしみつつ 〔職人絵合詩〕十二番右 塩焼



食肴之將有鹹甜 搯々輸采汲引添 沙構白兮波出素 煙蒸百斛竈中塩 (人倫訓蒙図彙) 糝師 味噌屋、饅頭屋等、其の外万民これを用ゆ。麴舟薄板あり。これに盛り合はせて、室に入れて、これを萌やす也。其の合式ごうしき井の定め成るゆへ、はからずしてもこれをかふなる、まじ実に律儀の至りなり。〔華紅葉〕寄塩売恋 思ふ事かなはで何と小豆鳴しほしほとただ赤穂がるるかなへ我胸〕〔誹諧職人尽〕塩売 かうち売 塩売も辛き目を見る寒さ哉へ梅是〕雪空や塩売の手のおもしろさへ薑菁〕 塩売の手からはたくや橋の霜へ水巴〕 塩売の吾妻からげや帰り花へ尾谷〕 塩売のたごも湿るや五月空へ一尺〕 秋寒し塩荷の連るる六浦道へ寥和〕 湯島奉納 花見るや麴屋殿も老松もへ甘谷〕 室咲きや糝むしろの懐子へ秀谷〕 道へ逢麴車口へ流涎 糝屋も甘酒ころや桃の花へ文尺〕 室咲きを簾にさすや糝売へ寥和〕 〔職人尽狂歌合〕

右 塩焼 君まさで烟たえにし六条の川原も塩とつもる白雪 ……右、貫之の哥を上句に取りて、かはらの大臣の塩釜をもて趣意とせられし、よろし。されど、雪を塩と見んこと、柳絮の例も侍れば、なつかしからぬにや。これも左勝ちて侍りなん。 / 左 塩やき 焼くしほに似てさへさらにからくなしあまぎる雪をなめて見つれば 左、古今集の哥なるあまぎる雪とは、大空にただよひたる雪なり。それが降りくるを、なべて降ればとは詠めるなり。此の塩焼の男、いかに丈だち高かりとも、大空まで頭の届くべきかは。右……またき勝と申すべし。 / 左 塩やき したり顔に出て雪見をすまの浦おのが焼きにし塩の降るかと 左、させるふしなし。……左の塩やきのしたり顔なるも、立ち並びては出で消えしつべくや。 / 左 麴造 米へんに造れる花の糝より一夜に寐かす竹の白雪 左、下の句感深し。……持にて侍るべし。 〔略画職人尽〕 齒磨きの松葉に製せ高砂のやうな翁の売るはりま塩

【本文】

卅八番

あきなひの秋のあたひもたかしほの  
こよひそ月の名をもうるなる  
にし京やかうちのむろ屋たれこめて

たかしほ―「類」高潮  
こよひ―「類」今宵  
にし京―「明」にし京「類」西京 むろ屋―「忠」「明」「類」むろや  
たれこめて―「類」垂こめて

月の夜ころをよそにみるかな

左右、哥さまおなしほとに見え侍にとり

て、むろやをたれこめたらんよりは、名月

こそ勝侍らめ。

おもひそむるむねのやきてのしほけふり

なひきなひかすせめてとは、や

恋すればあしもとよはしかうちうり

たふれあやうや火事いたすな

右依有興、可為勝。

◇

しほうり

きのふのくれ

うりの

あたひまで、

けふ

たまはる人

もかな。

かうちうり

上戸たち、御らむ



夜ころ―[類]よころ かな―[明]哉

見え侍―[明]見侍[類]見侍る

[白]〔恋ノ歌ト判詞欠〕 おもひそむる―[類]思ひ初る  
しほけふり―[類]塩けふり

あしもと―[類]足もと かうちうり―[類]麴売

いたすな―[類]出すな

◇

しほうり―[白]鹽うり[類]塩うり[忠] 卅八番しほ鹽うり

きのふの―[白]〔忠〕きのふ くれうり―[白]〔忠〕暮うり

たまはる―[白]〔忠〕給る

かうちうり―[白]麴売[忠]麴売[類]麴うり

たち―[白]〔忠〕達 御らむして―[白]〔忠〕御覧して[明]〔類〕御ら  
んして

して、  
よたれなかし  
給ふな。

【語注】

◎塩は古くから売買されていたが、十一世紀以降、瀬戸内沿岸の塩の集散地となった淀津を根拠として八幡神人と  
った塩商人の活動が目立つ（新大系、付録）。

麴売は、酒などの原料となる麴を製造、販売する者。応永二十六年以来、北野社に属する西ノ京神人が麴の製造、販  
売を独占していたが、文安元年、洛中の酒屋土倉と衝突し、その特権を失った。後、天文十四年、特権は復活した。

◎あきなひの…… 『飛鳥井雅康 職人歌』の商人の歌に同じ。

◎あきなひの秋のあたひもたかしほの 「商ひの秋の価も高し」は、秋は価高い（趣深い）季節であるばかりでなく、  
秋になると商ひ物の塩の価まで高くなる、という意味。秋に塩の値段が上がることについては、未考。なお、この二  
句は、ア音で始まる言葉を重ねる。「価も高し」から、「高潮の」と続ける。「高潮」は、大潮のときや、台風、津波な  
どによって、潮位が非常に高くなること。ここは、月の歌であり、ことに下句に、「こよひぞ月の名をも得るなる」と  
あるから、八月十五日の大潮による高潮と見てよからう。

◎こよひそ月の名をもうるなる 「名を得」は、名声を得ること。つまり、ここは、今宵が中秋の名月だとい  
のである。「得る」に「売る」を掛ける。「売る」は、上句の「価も高し」と照応する。

◎にし京 「にしのきやう」と読むか。明暦板本は、「にしの京」。「西ノ京」は、もと、平安京の右京をいうが、中世  
には、北野社に仕える西ノ京神人が住んでいた一条、二条あたり（現京都市中京区西ノ京）を、狭義で「西ノ京」とい  
った。ここに同神人による西ノ京麴座があった。

◎かうちのむろ屋 麴の室屋。麴を醸酵させるための温室。

◎たれこめて 「垂れ籠む」は、簾や帳を垂らしたり、戸や障子を閉めるなどして、室内に閉じ籠もること。「垂れ籠めて春の行くへも知らぬまに待ちし桜も移ろひにけり(因香)」(古今集、二、春歌下)を始めとして、まゝ、和歌に用いられるが、「麴の室屋」を「垂れ籠む」という表現は、勿論、異例。

◎夜ころ 「夜ごろ」は、数夜ないし毎晩の意もあるが、ここは、歌合の月の歌だから、十五夜の一夜だけと見て、一晚中の意と解したい。

◎よそにみる よそごとのように見る、すなわち、無関心でいること。

◎むろやをたれこめたらんよりは、名月こそ勝侍らめ 室屋を垂れ籠めて月に無関心でいる、という右の歌より、名月を讃えた左の歌の方が優れている、というのである。歌合の月の歌は、名月を讃えるのが原則である。

◎おもひそむる…… 白石本は、恋の歌と判詞を欠く。

◎おもひそむる…… 『飛鳥井雅康 職人歌』の塩屋の歌に同じ。

◎おもひそむる 「思ひ初むる」の「ひ」に、「火」を掛ける。「火」は、下の「焼き」、「煙」と縁語。

◎やきて 「焼き出」で、焼き始めの意か。そうだとすると、初句の「思ひ初むる」と照応する。「焼き」に、胸を焼く意と、塩を焼く意とを掛ける。

◎しほけふり 塩を作るため海水を煮るときの煙。ここでは、恋の煩悶の比喻として用いる。

◎なひきなひかすせめてとは、や 「塩煙」から「靡き」と続く。相手が自分に靡くのか靡かないのか、せめて問うだけでも問うてみたい。なお、『雪玉集』十に、「たきそむる思ひのけぶりあぢきなく靡き靡かず色に見せばや」と、このこと非常に似た歌がある。

◎恋すれはあしもとよはし 「足下弱し」は、足取りが危ないこと。勿論、雅語ではない。恋ゆえに、気もそぞろになつて、または、体が弱つて、足下がふらつくのであろう。

◎かうちうりたふれあやうや 「麴」に「孔子」を掛け、「恋の山には孔子の倒れ」という諺にもとづき、「倒れ危うや」と続けるか。「倒れ」は、足下がふらついて倒れる意味と、恋のために間違いを起こす意味とを掛けるのであろう。

◎火事いたすな 「火事」は「ひごと」と読む。火事のこと。「いたすな」は、「出すな」であろう。麴売は米を蒸すのに火を使うことから、火の用心をせよ、という意味に、恋のために間違いを起こすな、という比喩的な意味を掛けるのであろう。あるいは、文安元年、西ノ京麴座の神人が洛中の酒屋土倉と対立し、北野社に火を掛け、西ノ京が悉く焼亡した（康富記、文安元・四・一三）、いわゆる麴騒動のことを念頭に置いた表現かもしれない。いずれにしても、この歌は、麴売に呼びかけたような表現になっており、麴売自身の歌とすると、やや不自然である。

◎きのふのくれうりのあたひまで、けふたまはる人もかな 「きのふのくれうり」は、白石本、忠寄本は、「きのふ暮うり」とするが、誤写であろう。「くれうり」は「樽売」であろう。「樽」は、建築用の板材。また、屋根などを葺く削ぎ板。『沙石集』五本に、塩売から塩を高く買わされた学生が、その代償に、翌日来た樽売の樽を奪い取る、という話がある。中世末、これと同様な笑話が流布していたか。その笑話とは逆に、昨日の樽売に払うべき代金まで、今日の塩売に払ってくれる人がいればよい、というのであろう。

◎上戸たち、御らむして、よたれなかし給ふな 『唐詩選』所収、杜甫の「飲中八仙歌」の句、「汝陽三斗始朝天、道逢麴車口流涎」から思いついた冗談であろう。

### 【絵】

塩売は、烏帽子、直垂袴姿で、腰刀を差し、草鞋を履く。両端に箆を付けた枵を持つ。箆の一方に、塩と升。類従本は、升を描かない。

麴売は、頭巾をし、小袖の上に打掛を羽織る。前と横に、麴を入れた、円形と方形の器。白石本、忠寄本は、麴売の向きが逆。麴は、方形の器と結桶とに入れる。結桶の中に杓子。忠寄本は、この他に、升。

### 【参考】

○色が黒くはやらしませ、もとよりも塩焼の子で候まろ

（閑吟集）